

氏 名	光 永 修 一
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博乙第 4105 号
学位授与の日付	平成18年3月24日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	Important prognostic histological parameters for patients with invasive ductal carcinoma of the pancreas (浸潤性膵管癌の病理組織学的予後因子)
論文審査委員	教授 松川 昭博 教授 越智 浩二 助教授 猶本 良夫

#### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

临床上、浸潤性膵管癌の病理組織学的検討は予後予測という点においていまだ重要である。本研究の目的は、浸潤性膵管癌切除例 101 例を用いて、予後予測の上で重要と考えられる組織学的因子を明らかにすることであった。さらに、重要と考えられた組織学的因子を用いたスコア分類が予後を正確に予測しうるか検討した。多変量解析の結果にて、腫瘍径 3cm 以上、腫瘍壊死の存在、神経叢浸潤の存在、中等度以上のリンパ管侵襲が独立した予後予測因子として明らかになった。それら 4 つの因子を用いたスコア分類により、予後に応じた正確な層別化が可能であった。腫瘍径は、国際分類である UICC 分類の腫瘍因子として採用されている有力な組織学的因子であるが、われわれのスコア分類は腫瘍径で層別化しても予後分類として成立することが示唆され、腫瘍径とは独立した有用性を持つと考えられた。

#### 論 文 審 査 結 果 の 要 旨

光永修一氏は、浸潤性膵管癌の予後予測を上で重要と考えられる組織学的因子を明らかにするために、進行性浸潤性膵管癌切除例 101 例を用いて詳細に検討した。その結果、腫瘍径 3 cm 以上、腫瘍壊死の存在、神経叢浸潤の存在、中等度以上のリンパ管侵襲が独立した予後因子であることを明らかにし、さらに、これらの組織学的因子を用いたスコア分類が正確な予後予測に有用であることを示した。そして、従来の UICC-pTNM Stage 分類での予後評価に再考が必要であることを提起した。氏はさらに、予後予測の立場に立脚した神経叢浸潤の詳細な解析、それに基づく画像診断での予後予測の検討を行っている。また、術中照射の予後に及ぼす影響についても検討し、浸潤性膵管癌の根治治療に向けた取り組みに真摯に従事している。審査時の質問に対しては簡潔・的確に回答しており、膵癌に対する知識や手技のレベルは極めて高いことが伺える。

よって、本研究者は博士（医博）の学位を得る資格があると認める。